ホワイトデイ

Ｐ琢磨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ホワイトデイ

【Ｎコード】
Ｎ４１７１Ｒ

【作者名】
Ｐ琢磨

【あらすじ】
短編“ヴァレンタインデイ”の続編です。ゲームが上手い砂宮くんと、ゲームは好きだけど苦手な楽堂さんのホワイトデイな日常を描いたつもりが、ＦＰＳがしたくて堪らなかった鬱憤が食み出た短編のような中編です。

（前書き）

時季ネタ短編第1弾【ヴァレンタイン】の2倍の長さを誇る短編もどきに御座います。

【ヴァレンタイン】を読まなくても分かる内容になっている筈ですが、先に【ヴァレンタイン】を読んでおくとより一層楽しめるかと思われます。

「――砂宮くんって、どうしてそんなにゲームが上手いの？」
１４インチのモニターに映っている楽堂さんのキャラクターの視点の画面が突然、キャラクター視点から俯瞰視点へと切り替わり、彼女が操っていたキャラクターの死体を頭上から映し出す。僕はそれを自分のキャラクター視点の画面を見ながら、意識せずに眺めていた。
突然自分のキャラクターが死んだからだろう、楽堂さんは「あーっ！　今っ、誰に撃たれたの！？」と驚きに目を瞠って喚き出した。
「……う～ん、」コントローラーから手を離さず、意識も画面から逸らさず、僕は小さく首を捻った。「まぁ、好きだからかな、ゲーム」他に理由も無いので、僕はそう淡々と答えた。
「ふぅん」気の無い吐息を落として、画面に映っている楽堂さんのキャラクター“ＲＩＭＩ”がリスポンし、再び戦場を駆け出したのを横目に覗う。「……私もゲーム、好きなんだけどな？」チラ、と悪戯っぽい表情を見せた。
「えぇーっと、」どう言い繕えばいいのか分からず、思わずコントローラーから右手を離して頬を軽く掻いた。「まぁ、やり込みの度合いが違うんだよ、きっと」
「ふぅん？」悪戯っぽい笑みのまま、楽堂さんは視線をモニターへ戻した。「まっ、そういう事にしとこっか」
納得はしてないけど、深くは追求すまいと言う楽堂さんの反応に、僕はホッと胸を撫で下ろす。
ゲームに上手い下手は勿論ある。好き嫌いもそうだ。どんなゲームだって、やり込めばやり込むだけ上手くなるし、やらない限り上手くなる事はまず有り得ない。
どんなプロゲーマーだって、やり始めはヘタクソだったに違いない。そのゲームが好きで好きで仕方ないからこそ、どれだけでも時

間を費やす事を厭わない。その膨大なプレイ時間の対価として実力が付くのは当然だ。
ジャンルの得手不得手は勿論、上達の速さだって個人差がある。僕はたまたまゲームをするのが好きで仕方なくて、幼い頃から触ってきただけに、どんなゲームも始めた時からどう立ち回ればいいのか、漠然と分かっていたりする。そういうアドヴァンテージは仕方ないと思う。
楽堂さんの発言でそんな思考に囚われていながらも僕は、プログラムが操作する兵士に殺される事無く、無難な順位をキープしつつ、その日も何事も無く、僕は午後六時に楽堂さんの家を後にした。

◇――◇――◇

ヴァレンタイン以後も僕と楽堂さんの関係は全く変わっていない。下校したら楽堂さんの家にお邪魔して、午後六時までゲームをして、僕は帰途に着く。たったそれだけの関係だったけれど、僕はそれ以前の生活より何倍も充実しているように感じた。
今日は三月十四日の月曜日。ヴァレンタインの対になる、ホワイトデイだ。僕は鞄の中にこっそりクッキーを忍ばせていた。近所の駄菓子屋で買ってきた、小さなビニールの袋に納められた、税込み３１５円の小さな星型に縁取られたクッキー。
今年のヴァレンタインは僕にとって特別な日になった。だから今日は、僕が楽堂さんに特別な日をプレゼントしたかった。女の子にプレゼントを渡すなんて勿論初めてだったけれど、何故か楽堂さんに渡すって考えると、思ったほど緊張しなかった。
午前中は明日に控える卒業式の予行演習が入っていた。僕自身、部活や委員会とは無縁の生徒だったから、お世話になった先輩はいないし、お世話をしている後輩もいない。友人関係もクラスメイト数人だけの小さな輪の中で学校生活を楽しんでるから、こういうイヴェントには何の感慨も無かったりする。

周りの生徒に意識を向けると、涙もろい子なのかまだ本番でもないのに瞳を赤くしてる子がいる。勿論、僕同様に卒業式に関心の無い生徒は、隣や前にいる生徒とじゃれ合っていたりしている。

今年から僕も三年生になる。つまり受験生だ。ゲームばかりしていられるのは、多分今だけだろう。受験勉強して、高校生になって……もしかしたら浪人してまた一年、受験勉強しなくちゃいけないかも知れないけど。

漫然とそんな事を考えてる内に卒業式の予行演習は終わり、午前で下校となった。

僕は鞄の中に忍ばせていたクッキーが無事な事を確認すると、教室を発った。皆は来月のクラス替えに就いて気を揉んでいたけれど、こればっかりは教諭の意志次第だろうと僕は諦観してる。今は楽堂さんにクッキーを渡す事が最優先事項だった。

教室を出ると、廊下を大股に突き進む。階段を一段飛ばしに下りて、下駄箱まで辿り着いたけれど、定位置にいる筈の楽堂さんの姿が無かった。今日は僕の方が早く来過ぎたのかな？　と思ってキョロキョロ見回しつつ、落ち着かない気持ちで下駄箱の周りをウロチョロしてしまう。

「――あれ、砂宮くん？　もしかして、りっちゃん待ってるの？」

――不意に声を掛けられて心臓を口から吐き出しそうになった。驚いて振り返ると、手提げ鞄を肩に掛けて僕を見つめる女生徒がいた。短く切り揃えた黒髪にカチューシャを付け、ぶ厚いレンズの眼鏡を掛けている姿から、以前、楽堂さんから友人だと紹介された尾賀さんだと分かった。“りっちゃん”とは彼女が楽堂さんを呼ぶ時の渾名だ。

楽堂さんの友達なんだけど、彼女はゲームをしないから僕とはあまり係わり合わない生徒だった。ただ、僕と楽堂さんがゲームをする仲だと知ってて、「あまりゲームばかりしてないで、勉強もしなさいね？」と保護者のような姿勢で僕達に接してくれている。

「――あ、うん、そうそう」と不審な挙動と自覚しながらも頷いた。

「りっちゃんならさっき、二組の葉倉くんと音楽室の方に行ったみたいだけど」尾賀さんは玄関とは真逆の方角を指差した。
僕は呆気に取られて、暫し言葉を返せなかった。

◇――◇――◇

嫌な予感が胸の中にモヤモヤと広がっていく。勝手に妄想してるだけで、ただの勘違いだって事も充分に考えられるし、固より僕が口出しすべき問題ではない。
にも拘らず僕の足は、自然と、早足で、尾賀さんが指差した先にある第二音楽室に向かっていた。心臓が気持ち悪い音を奏で、僕の神経を削り取っていくのがよく分かる。近づくに連れてどんどん悪化していく吐き気を伴う気分の悪さを無視して、僕の足はまるで機械のように停止を忘れて突き進んで行く。
グチャグチャの思考が纏まる前に、僕は第二音楽室のある廊下へ至る角に辿り着いた。ここを左折すれば、第二音楽室へと続く廊下になる。下校する生徒が近づくような場所じゃないためか、玄関に比べるとひっそりしてる。今日は午前中から気温が比較的高かったのに、ここだけはまるで熱を吸収してるかのように冷え切ってる。
――息遣いが聞こえる。
廊下の先に誰かいるのは明らかだった。その気配を察した僕は、咄嗟に息を殺した。盗み聞きするなんて何を考えてるんだ、と自分を諌める声が胸の底で湧いたけど、感情がそれを否定した。
「――それで？　私に用って、何かな？」
――それは間違い無く、楽堂さんの声だった。戸惑っている風に聞こえるその声は、勿論彼女の眼前にいるであろう相手――二組の葉倉くんに注がれてるんだろう。
「単刀直入に言わせてもらう。楽堂、お前に一目惚れしたんだ。俺と付き合って欲しい」
息が詰まるかと思った。緊張が心臓を破壊しようと重労働を強い

始める。無理な稼動に心臓がバクバクと跳ねて、酸素がまるで足りないような息苦しさを覚えた。
決して当たって欲しくなかった最悪の予感が、的中した。心臓は無意味に血液を全身へ駆け巡らせていると言うのに、顔から熱が消えていくのが感覚で分かった。
怖かった。楽堂さんの返答を聞きたくなかった。――いや、聞きたくもあった。聞いて、安心したかった。
思考が崩壊したかのように訳の分からない単語を浮かべては沈める状態が、一体どれくらい続いたのか。楽堂さんが間を置いて、ようやく口を開く気配がした。
「――いいよ」
……その言葉を理解するのに、時間は掛からなかった。
そして次の瞬間に総身を包んだのは諦念だった。熱を失った顔に、ゆっくりと血液が送り込まれてくる。頭が意味不明の単語を吐き出していたのが急速に減退して、ただ一つの事実を意識に刻み込んだ。
僕は、必要なくなった。
その言葉だけで現状の説明は全て事足りた。僕はゆっくりと、足音を立てないようにその場を離れ、何事も無かったように下駄箱で靴を履き替えると、帰途に着いた。
今日から楽堂さんの家には寄らなくていいんだと思うと、目元に熱い感情が滲んできた。

◇――◇――◇

何だか今日は学校を休みたい気分だった。肉体は健常なのに、食欲は無いし体が妙に重い。風邪を引いた訳じゃないし、原因は自分自身がよく分かってる。だからこそ、行きたくなかった。
今日は卒業式。別に授業がある訳じゃないし、皆勤賞を狙っていた訳でもない。今日に限って一人くらい休んだって、何の問題も生じまい。親に一言「風邪っぽいから今日は休む」と言って、担当教

諭に連絡さえすれば、それで今日は一日自分の部屋でゲームに没頭する事が出来る。
そう思って身を起こすと、不意に階下から電話のコール音が鳴り響いた。こんな朝っぱらから誰だろう？　と思っただけで、電話に出る気も無ければ階下に下りる気も萎えてしまった。家人が電話を終える頃に起きようと思って布団に潜り込み直そうとしてたら――
「正樹～！　楽堂さんって人から電話～！」と母さんの大声が轟いた。
驚いてガバッと布団を跳ね上げ、それから――何を聞き間違えたんだ？　と努めて冷静になろうと鼻から大きく息を吸い込んで――
「――楽堂さんから？」結局自分の耳を信じる事にした。
何だろうと思いながら慌てて部屋を出て、急な階段を飛び降りるように一階の廊下に着地すると、母さんが「はい、早く出なさい！――ってあんたまだパジャマなの！？　遅刻するわよ！」と受話器を持ちながら怒声を響かせた。
「分かった分かった、分かったから受話器くれ」“うるさい”と両手で耳を押さえる仕草をしてから受話器を受け取る。「――もしもし？」声を掛けながら、僕の心臓はまたも気分を害する速さで鼓動を刻み始めた。
「あ、砂宮くん？」その声は電話機越しでも分かった。――楽堂さんに違いなかった。「昨日、何で待っててくれなかったの？」
「――えと、ごめん」頭が真っ白になりかけて、「――ちょっと外せない用事があったんだ」咄嗟に嘘を口にしてから、僕は何を言い訳してるんだろうと、自分の存在が途端に滑稽に思えてきた。「てか何でウチの電話番号……」知ってるの？　まで言葉に昇華できず、まごついてしまう。
「ん？　あぁ、小学校の時に使ってた連絡網、捨てたと思ってたんだけど、机の引き出しにまだ残ってたの」ちょっぴり嬉しげに応じる楽堂さん。「――まぁそれはいいんだけど。今日さ、学校サボってウチに来てくれないかな？」

受話器を握り締めたまま、僕は暫し何を言われたのか理解できなかった。「……え？」
「本当は昨日しようと思ったんだけど、砂宮くん先に帰っちゃうし」不満そうに呟く楽堂さん。「だから昨日のお詫びを兼ねて、今からウチに来てね」
「え、は、い、ぇえ？　でも今日、卒業式なんじゃ……」サボろうと思ってたくせに、と心の中で自分に突っ込む。
「いいからいいから。急いで来てね。それじゃ」
そこでブッツリと通話が切れて、僕は受話器を握り締めたまま途方に暮れた。背後で母さんが「き～が～え～ま～だ～？」と鬼のような形相で仁王立ちしてるのに気づいたのは、次の瞬間だった。

◇――◇――◇

「――おっ、早い早い～。さっ、上がって上がって」
玄関口で迎えてくれた楽堂さんは、昨日あんな出来事がありながらも、やっぱりいつもの楽堂さんだった。今日はセーラー服姿じゃなくて、ラフなパーカーにジーンズと言う格好だ。
僕は無論、学生服である。学校に行くと言う名目で家を出たのだから当然なんだけれど。もしかして迎えに来いとかそういう意味で呼び出されたのかなと思いもしたけど、やっぱり違うみたいだ。
「……お邪魔します」
と、いつもどおりの声を掛けて靴を脱ごうとして――見た事が無い靴が一足、並んでいる事に気づいた。同年代くらいの子が履きそうなシューズ。嫌な予感が再び僕の脳裏に芽生えた。
ここ一ヶ月で見慣れた廊下を突き進み、彼女の部屋へと辿り着く。その狭苦しい部屋に、僕は見覚えの無い男子を見た。
「――お前が砂宮？」
黒髪はバサバサ……無造作ヘアーとでも言うんだろうか、取り敢えず整ってはいないけど、艶はある。イケメンに分類されるような、

端整な顔立ちをしている。運動部に所属していそうな雰囲気と言うか、体つき。サッカーでもしていれば、女子が総出で応援しに行くだろうな……そんな気にさせるくらい、ルックスは抜群と言えた。
格好は僕と同じく、学校の制服姿なんだけれど、僕のと比べると随分と着崩れしている。カフスは全部外して、派手な赤いシャツが見えている。ベルトも学校指定のモノじゃなく、ごついイメージの湧くモノを使ってる。
一言で言うならば、僕が学校生活に於いて率先して係わり合いを持つような男子ではない生徒だ。
「う、うん」気後れしながらも、何とかそう受け答えをする。
「俺は葉倉」つっけんどんに告げ、「――なぁ、楽堂。何でこんな奴と付き合ってんの？」とすぐさま僕から視線を逸らし、丁度僕と男子――葉倉くんの間に立つ楽堂さんへ視線を投げる。
「付き合ってないよ」キッパリと応じ、楽堂さんは僕に視線を向けた。「紹介するね。彼、葉倉くん。昨日、私に告白してきたんだ」
胸が詰まったかのように呼吸が止まりかけた。「そ、そうなんだ」辛うじて返答できた自分を褒めてやりたかった。
「葉倉くん」と楽堂さんは僕から彼へと視線を転ずる。「彼が昨日言ってた砂宮くんね。私の“ゲーム”に付き合ってくれてるの」
「……“ゲームに”、ねぇ」鼻で笑う葉倉くん。
ムッとはしたけど、表情には出てないと思う。僕はこの状況がイマイチ掴めず、楽堂さんに視線を向け直す。「あの、それで何で僕はここに呼ばれたの？」
「あれ？　言ってなかったっけ？」不思議そうに黒瞳をパチクリする楽堂さん。それからベッドに寝かされていたゲーム機のコントローラーを手に取り、「勿論、――ゲームだよ」ニコッとはにかんだ。

◇――◇――◇

楽堂さんのベッドの上の、葉倉くんの右隣に僕が腰掛けている間

に、楽堂さんは狭い部屋の中を器用に進んで、ゲーム機の電源を入れる。僕はコントローラーを握ったまま、訳の分からない成り行きを見守るしかなかった。
「よしっと」
電源が正常に点り、モニターに最近二人でプレイしていたＦＰＳのゲームのオープニングが流れ始めた。それを確認した楽堂さんは僕の右隣に腰掛けようとしたけど、狭かったんだろう。僕に「もうちょっとそっち詰めて詰めて」と僕の肩を押し込んでいく。
葉倉くんに申し訳ないと思いつつも席を詰めると、狭い部屋の小さなベッドに、三人の男女が肩を寄せ合って納まった。
「さぁ、始めましょっ？」邪気の無い笑顔で僕達を振り返る楽堂さん。
「……えと、ゲームを始めるのは分かるんだけど、」コントローラーから手を離して、頬を軽く掻く。「何で僕がここに来なくちゃいけなかったのか訊きたいんだけど……」
「……お前、何も聞かされてねえの？」返事が逆隣から返ってきて、僕は驚いて振り返った。葉倉くんは怪訝な面持ちで僕を見据えている。
「う、うん」いつもの事だと思いながらも、僕は神妙に頷いた。
「俺とお前が勝負して、俺が勝ったら俺は楽堂と付き合う。お前が勝ったら俺は楽堂を諦める。――だったよな？　楽堂」確認するように、僕越しに楽堂さんを見やる葉倉くん。
「そそー。で、葉倉くんもゲームが得意だって言うから、中でも得意なガンシューティングで勝負をしようって提案したの」言いながらも視線はモニターに向かっている楽堂さん。いつもの操作で対戦プレイを選択し、キャラクターを決め始める。「そこで、砂宮くんに私の代わりをやってもらおうって訳なの」
……何となく分かってきたけど、僕はあまり乗り気じゃなかった。いや、理由を聞いた時点では意気も上がったけれど、僕は楽堂さんと葉倉くんが付き合う事に反対じゃなかった。むしろ、僕みたいな

奴よりも葉倉くんの方がよっぽど楽堂さんにお似合いなんじゃないかって思えたんだ。
「砂宮ってゲームそんなに上手いのか？」興味が湧いたのか、僕に純粋な好奇心を向ける葉倉くん。
「え、あ、いや、そこそ――」「すっごい上手いんだから！　葉倉くんじゃ手に負えないかも！」僕の発言を遮ってとんでもない事を言ってくれる楽堂さん。
「――ほう」僅かだけど目が見開いて怖い形相になる葉倉くん。「楽しみだな、腕が鳴るぜ」
「ちょっ、楽堂さんッ！？」思わず悲鳴に似た声が飛び出た。
「本当の事でしょ？　――さ、じゃあルールを説明するね」僕の焦燥などまるで意に介さず楽堂さんは説明を始めた。
ルールは十分間、敵チームのキャラクターをどれだけ多く倒せたかを競う“チーム・デスマッチ”。チーム編成は僕と楽堂さんのチームと、葉倉くんとＣＰＵ――コンピュータキャラクターの二対二。
ルールを説明されて間も無く、ゲームを開始するべくキャラクターの選択画面に移った。
「そうだなー、私はやっぱり科学者にしようーっと」
今始めようとしてるＦＰＳは、ゲーム開始時とリスポン時に一切の武器を持たない状態から始まる。武器を手に入れるには、マップ上の決められた位置に落ちている武器を取りに走らなければならない。開始時とリスポン時の初期位置、そしてどの武器がどこに落ちているか把握しておかなければ腕の立つプレイヤー相手には不利になる。
僕はそれを危惧して葉倉くんに視線を投げた。あまりに僕達が有利過ぎるんじゃないかと気遣ったんだけど、彼は僕の視線に不敵な笑みを返した。
「悪いな、昨日楽堂にどのゲームで対戦するか聞いてたから、予習はしてあるぜ」へへ、と屈託の無い笑顔を向ける葉倉くん。
僕はふと疑問を覚えて口を開いた。「ねぇ、僕がもしここに来な

かったら、この対戦ってどうなってたの……？」
「不戦勝で俺の勝ち。って言ってたよな？　楽堂」また僕越しに楽堂さんへ視線を投げる葉倉くん。
「うんー、そうそう～」気の無い返事をしつつ、対戦の場所となるマップを選ぶ楽堂さん。
……楽堂さんは、どこまで僕を信じてるんだろう。それとも、僕はここに来るべきじゃなかったんだろうか。楽堂さんと葉倉くんが付き合うのを邪魔しないためにも、ここは……
「よーし、みんな準備はいい？　そろそろ始めるよ！」
快活な笑顔でそう告げる楽堂さんが眩しくて、僕はモニターに映る自分のキャラクターから目を離せなかった。
これで最後にしよう。そう決意を固めて、――ゲームは始まった。
ゲーム開始の音楽が流れた瞬間、四分割されたモニターの、右上の画面――葉倉くんのキャラクターの視点をそれとなく見ながら自身のキャラクターの操作を開始した。
一目で分かった。動きに無駄が無く、有利となる武器へ向かう道に迷いが無く、的確にポイントとなるであろう楽堂さんのキャラクターへ向かって走る容赦の無さ。最大速度を維持しつつも決して障害物にぶつかって動きを阻害する事無く移動する様は、まるで最強クラスのＣＰＵの操作を見ているようだった。
始まって十五秒と経たずに葉倉くんは楽堂さんを捕捉し、その経路で入手したアサルトライフルで鮮やかにヘッドショットを決め――楽堂さんは早くも倒れた。
「あれ！？　もう死んじゃった！？」
驚きに声を張り上げる楽堂さん。それはそうだろう、彼女の視界には葉倉くんの姿は無く奇襲に近い位置取りから必要最低限の弾数でヘッドショットを決められたんだ、何が起こったか理解が及ばないに違いない。
――強い。始まって三十秒を待たずに葉倉くんの腕前は明快過ぎるほどに分かった。

このまま僕が戦闘に貢献しなければ、勝負は自然と彼の勝利で締め括られるのは明白だ。むしろ、いつもどおりの動きで彼と対面しても勝てるかどうか分からないくらいだ。

ゲームが上手くて、ルックスもいい。性格はちょっと難がありそうだけど……それで楽堂さんと均衡が取れるなら問題ない。

僕はゲームが始まる前同様、負けるつもりで葉倉くんの元へ殺されに行こうとキャラクターを走らせ――「うわ、雑魚いな楽堂」――はたと操作する指が止まった。

「楽堂がこんな雑魚いなら、砂宮も大した事無いだろ。楽勝だなこりゃ」

吐き捨てるように楽堂さんを罵倒する葉倉くん。嘲弄するように口唇を緩て、彼は更に言葉を続けた。

「ハハッ、つまんねえ勝負になっちまったな」

ギリ。――それは、僕の心の中にある大事な何かが駆動する音のような気がした。

◆――◆――◆

リスポンした楽堂を探す前に、俺は砂宮のキャラクターと一度ぶつかってみたかった。楽堂が嬉々として紹介する、ゲームの達人だと言う砂宮。それはゲーム開始時からチラチラと彼の画面を見ていれば分かる。――俺以下の実力だ、と。

勝負に有利となる武器を優先して取りに行かないだけでなく、強さが並に設定されているようなＣＰＵにさえ向かって行かない。俺の腕前を見て怖気づいたのか、それとも並の強さのＣＰＵでさえ倒せないような雑魚なのか。

まるで負ける気がしない。俺は口唇に昇る笑みを堪え切れず、小さく笑声を零してしまう。

「――楽堂さん」ポツリと、砂宮が呟く声が聞こえた。「悪いけどこの勝負、勝たせてもらうね」

砂宮が何を言ったのか、一瞬理解が追いつかなかった。それが俺に対する挑発だと気づいて言を返そうと思って――「――うん。砂宮くんならそう言ってくれるって信じてたよ」――楽堂の、全てが予定通りとでも言いたげな声に、俺は更に鼻白んだ。

「……上等じゃねえかよ？　砂宮。お前、お荷物背負って俺に勝てるつもりかよ？」売り言葉に買い言葉で応じてやる。

「……」砂宮は無言のままコントローラーを操作するだけで、俺の挑発には乗ってこなかった。

面と向かって挑発できない上に、相手からの挑発はスルーか。とんだ臆病者だぜ、と俺は鼻で笑ってやった。

まずは俺に立ち向かうと言う事が如何に無謀な事かを理解させる必要がある。俺は楽堂より先に砂宮を探すべく、砂宮の視点の画面を見て、――怪訝に顔を顰めた。

映っているのは壁だけ。恐らく砂宮のキャラクターは、壁に前身を押し付ける形で移動しているのだろう。レーダーが存在しない今回のルールでは、そのキャラクターがどこを走っているのか、壁の色で把握するしかない。そもそも壁に沿って移動すれば、誰かと遭遇した時に即応できまい。

――吼えるだけ吼えといて、やる事は逃げの一手かよ。

あまりに残念なプレイに、俺は落胆を禁じ得なかった。所詮その程度のプレイヤーか。――だが、俺に喧嘩を売ったからには全力で屠らせてもらう。壁の色を見れば、マップ上のどの辺にいるか、大体だが把握できる。相手は壁しか見えていないのだから、自分がどこを走っているかも分かるまい。――次の角を曲がれば俺と遭遇する。口唇に滲む笑みを殺してフルオート射撃の体勢を取った。

そして砂宮のキャラクターが見えたと思った瞬間、俺のキャラクターの視点は俯瞰視点に切り替わり、自分が倒れた体を見下ろす光景になった。

「――――は？」思わず変な声が出てしまった。

何が起こったのか。それは自分の目と頭が確りと把捉している。

――砂宮が角から飛び出した瞬間、奴は通常の体勢じゃなかった。匍匐（ほふく）の姿勢で俺の前に現れ、俺が狙っていたヘッドショットを難無く躱すと、装備していたハンドガン――リロードとラグは致命的だが一撃の重さが売りのマグナムによるヘッドショットで俺を即死させた。

――ゾクリ、と背筋が怖気に粟立つ。何だ、今の動きは。思わずリスポンした事も忘れて画面に見入ってしまう。何が起こったかは的確に理解しているが、それを脳が上手く受理できない。あれはとてもじゃないが俺以下の腕前で出来る芸当じゃない。そして初心者が一朝一夕で身に付けられる技術でもない。

「――次は左。その先にアサルトライフルが落ちてるから、拾った方がいいよ」

驚きに震える俺の感慨などお構いなしに、砂宮は画面に視点を固定したまま呟きを漏らした。何の事を言ってるんだ？　と思って改めて意識を画面に戻すと――

「あー、これだね？　よーしっ、これでガンガンやっちゃうよー！」

楽堂がアサルトライフルを装備したのを見て、――砂宮が楽堂にアドバイスを投げているのだと気づいた。

そして俺は慌てて有利となる武器であるアサルトライフルを入手すべく走り出そうとして――画面が俯瞰視点に切り替わった。そして高速の動きで俺の屍を越えて走り行く人影を目にする。俺は唖然としたままその画面を食い入るように見つめていた。

「次の角を曲がれば接敵するかも。気を付けてね」

「はーい。あ、ホントだ！　どりゃーっ、死ね死ねー！」

砂宮の助言どおり、楽堂の移動先にＣＰＵが走っている姿が飛び込んで来る。視認した楽堂は先ほど手に入れたアサルトライフルをフルオート射撃し、あっと言う間にＣＰＵを片付けてしまう。

その間に復活した俺はと言えば、完全に肝が冷え切っていた。急いで武器を入手せねば、抵抗する間も無く殺される。ゲームと現実がリンクしたかのような恐怖心が心臓を締め上げる。尋常ならざる

敵兵の存在に、俺は初めてゲームの中で心の底から恐怖した。
　あくまで砂宮は壁伝いに走って来る。そのせいでどの辺りにいるのか分からなくなるどころか、自分のキャラクターを武器のある場所まで走らせるだけで必死に画面に見入ってるせいで、完全に見失ってしまう。そして気づいた時には彼の眼前に自分の姿を晒してしまい、刹那に命を刈り取られてしまう。
　淡々と俺を殺す作業に順ずる砂宮はと言えば、そんな高次元な操作をしながらも楽堂にアドバイスを呟き続けている。どんな集中力が奴をそこまで仕立て上げたのか、俺には理解が及ばなかった。
　やがて十分と言う永遠とも思える時間が過ぎ去り、三十五対六と言う致命的な点差で俺は敗れた。
「ふぁーっ！　楽しかったね～！」
　たった十分間ゲームをしただけだと言うのに、部屋の中は夏場のような熱気に見舞われていた。それに気づかないほど、俺は集中していたらしい。楽堂の声に応じるように、「あ、あぁ……」とコントローラーから手を離して、――手が汗でぐっしょりと濡れている事に気づいた。
　恐る恐る、砂宮に視線を向けると、――何故か、申し訳無さそうに俯いていた。とてもじゃないが、勝者の顔つきじゃない。
「……えと、ごめん。勝っちゃった」コントローラーから手を離して頬を軽く掻く砂宮。
「ん？　何で謝るのさ？」キョトン、と俺と同じ想いを口にする楽堂。
「だって……その……」ゴニョゴニョと小声になる砂宮。「二人が付き合えば、お似合いかな、って……」
　……はぁ？
「じゃあお前、わざと負けるつもりだったのかよ？」沸々と怒りが込み上げてきた。
「ご、ごめん……」悄然と縮こまる砂宮。
「――じゃあ、私と砂宮くんはお似合いじゃなかったの？」

更に怒りをぶちまけようとする直前、楽堂が砂宮の顔を覗き込んで言った。
沈黙する砂宮。……あぁ苛々するッ。
「私は、――お似合いだと思ってたんだけどなっ？」澄ました笑顔で告げる楽堂。
「――えっ？」驚いて顔を上げる砂宮。
「まぁとにかく、勝負は砂宮くんの勝ちだから。葉倉くん、私の事は諦めてねっ！」コントローラーを持った手で俺を指差してくる楽堂。
「……ちッ、約束は約束だからな……クソ悔しいけど……」苛立ちを隠しきれないまま吐き捨てる。「でも、一つだけ聞かせてくれよ」睨み据えるように砂宮を見据える。「お前、壁から飛び出た瞬間、どうやって俺のキャラにヘッドショットできたんだ？　いや、やり込みゃそれくらい楽勝なのかも知れねえが……」
砂宮は「えと、」と頬を軽く掻きながら、「葉倉くんのキャラの視点さえ分かれば、そこに向かって撃つだけだし……」
「……は？」何を言われたか一瞬理解し損ねて、「んじゃお前、相手の画面見るだけでどこに頭があるか分かるって事……か？」
それはやり込めば済むって問題じゃない。俺のキャラクターの視点を見ただけで、その頭が自分の画面上のどこに映るか掌握するなんて……プロでもそんな芸当が出来る奴はいるかどうかだろう。
砂宮は気後れした様子ながらも、「う、うん」と確かに頷いた。
その時点で俺の敗北は、どうしようもなく決定的になった。

◆――◆――◆

「――あーッ、クソッ！！」
楽堂さんを賭けた対戦が終わり、葉倉くんは不服そうにベッドから立ち上がって怒号を張り上げた。間近で轟いた怒声に驚いて、思わず肩を竦ませてしまう。隣では楽堂さんがキョトンとしていた。

「負けちまったからには約束は守ってやる！」僕を指差して激昂する葉倉くん。「だがな、これで終わりだと思うなよ！？」
「え……？」どういう事？　と目をパチクリしてしまう。
「――次だ！　次こそお前を全力で負かす！！　覚えてろよ！？」
裏声に近い声を発して部屋を横切ると、駆け出して行く葉倉くんに、僕は即座に返す言葉が見つからなかった。――けど、答はもう頭の中では出来上がっていた。
「いいよー。また三人でゲームしよっ！」
僕の心の声を代弁するように、楽堂さんがはにかんだ。葉倉くんは玄関へ向かっていた足を止め、振り返って居心地悪そうにそれを受け取り、それから僕に視線を向けた。「……絶対に逃げるなよ」
「う、うん」ちょっぴり怯みながらも、僕は確かに首肯を返した。
「待ってるよ」
それだけで言葉は足りていた。葉倉くんは「……忘れるなよ？」と短く念を押して、「じゃあな！」と背を向けると、そそくさと立ち去って行った。
玄関の扉が閉まる音が聞こえて、部屋がゲームのＢＧＭだけの静かな空間に沈んだ。まるで嵐が去った後のように、水を打ったように静かになった。
「――あ、」僕は思い出したように持って来ていた学生鞄を手に取った。中をゴソゴソと漁り、小さなビニールの袋を取り出した。
「なに、それ？」楽堂さんが手元を見つめたまま不思議そうな顔をした。
「今日……じゃないや、昨日、ホワイトデイだったから」僕はそう前置きをして、「これ、あげる」クッキーの入った包みを手渡した。
受け取った楽堂さんは暫しポカン、としていたけれど、やがて嬉しげにはにかんでくれた。「ありがとう」そう言ってクッキーの包みを手の中でこまねくと、「でも、どうして本気になってくれたの？」と悪戯っぽく微笑みかけてきた。
「本気？」言葉の意図を掴めずに繰り返してしまう。

「始めは負ける気だったんでしょ？」上目遣いに僕を見つめてくる楽堂さん。「どうして、勝とうと思っちゃったの？」
「……だって、好きな物を傷つけられるのは嫌だったんだ……」俯いて呟く。
呟いてから、それが告白に近いモノだと気づき慌てて訂正しようと顔を上げると――「やっぱり、砂宮くんはゲーム大好きなんだね～」――うんうんと満足気に頷く楽堂さんを見た。
「……え？」楽堂さんの発言に付いていけず、呆気に取られてしまう。
「ん？　ほら、葉倉くん言ってたじゃない。くそつまらないとか何とか。それでカッとなったんじゃないの？」逆にキョトンとする楽堂さん。
「いや――あ、いや、うん。そうそう」慌てて頷く。「それもあるんだけど……」
「それ“も”？」ますます疑念に満ちた顔になる楽堂さん。
「い、いや、いいんだ。とにかく、今日はもう帰るよっ」慌てて鞄を抱き締めて立ち上がる。
「えー？　もう帰っちゃうの？　折角だし、もうちょっとゲームしてかない？」コントローラーを手に懇願する楽堂さん。
その申し出には抗い難い何かがあったけれど、僕は首を横に振った。「ううん、今日はもう帰るよ。えと、――また、明日」落ち着いて微笑を出せた気がする。
楽堂さんはまだ不満そうだったけど、僕を見つめて諦めたように微苦笑を浮かべた。「うん、また明日。――明日は絶対に待っててよね？」釘を差すように指差してきた。
「う、うん。約束する」慎重に頷いて、僕は部屋を後にした。
玄関で靴を履きながら、――小さく嘆息が漏れた。結局今日も、僕は特別な日をプレゼントされてしまった。……と言うか、楽堂さんには敵わないな、って今更のように感じた。
「砂宮くん」

玄関の扉を開けて出て行こうとしたその時、背中に楽堂さんの声が掛かった。振り返ると、普段着の楽堂さんが廊下に頭を付けて微笑んでいた。

「好きなモノ、もっとやり込んでいこうね」

意味深な笑みでそう呟いた楽堂さんに、僕は「うん」と短く返して、背を向けた。

今日も気温が高くなりそうな、青く澄み渡る空を見て、僕は小さく足を踏み出した。

――――【完】

（後書き）

時季ネタ短編第2弾【ホワイトデイ】はいかがでしたか？

いつものP作品らしく無駄に長いです本当に有難う御座いました。

冗長大好きなんだっ！

ご感想等々お待ちしております～！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4171r/

ホワイトデイ

2011年3月14日10時10分発行